

アステールプラザ

神楽鑑賞会



一幕【塵^{じん} 倫^{りん}】後津神楽団

二幕【土^{つち} 蜘蛛^{ぐも}】中川戸神楽団

三幕【滝^{たき} 夜叉^{やしや} 姫^{ひめ}】大塚神楽団

四幕【青^{あお} 葉^は の 笛^{ふえ}】中川戸神楽団

平成29年 5/21 (日)

開場 12:00 開演 13:00 終演予定 17:00

主催：ひろしま神楽鑑賞委員会
(公財)広島市文化財団アステールプラザ
後援：広島市

JMSアステールプラザ中ホール
広島市中区加古町4-17

全席指定 1階席 3,000円 2階席 2,000円

チケット発売 4月8日(土)
JMSアステールプラザ 082-244-8000
エディオン広島本店 082-247-5111
ひろしま夢ぷらざ 082-544-1122
北広島町観光協会 0826-72-6908

※ビデオ・写真撮影は禁止です。
※会場内での飲食はできません。ロビーをご利用ください。

お問い合わせ ひろしま神楽鑑賞委員会 Tel.0826-72-5307 / JMSアステールプラザ Tel.082-244-8000
(NPO広島神楽芸術研究所) 9:00~17:00 月曜日定休

アステールプラザ神楽鑑賞会

アステールプラザ神楽鑑賞会は、神楽の生い立ちや由来を大切にしながらも、『郷土芸能・神楽の伝統を創造する』を基調テーマに取り組み、広島神楽の未来を探ろうとするものです。

1993年5月、アステールプラザで『スーパー神楽・中川戸』という神楽界初の自主公演としての『ホール神楽』を開きました。広島神楽は、もともと江戸時代末期に島根県の石見地方から伝わり、県北の郷土芸能として育ちました。米の収穫を終えたのちに氏神社の秋祭りで奉納される農耕儀礼であり、農民の娯楽だったのです。この米づくり文化を象徴する神楽を総合芸術・舞台芸術に進化させ、都市文化の拠点・ホールで披露して以来、20余年が過ぎました。そして今、広島が誇る日本の民俗芸能として評価されるようになったのです。



鬼とは 古代の人々は、春夏秋冬、大自然の営みに従い暮らしを築いてきました。田畑を潤して流れる川を神と信じる一方、大洪水となって荒れ狂う川は鬼としました。大自然は、豊かな恵みを授けてくれる神であり、暮らしを破壊する鬼『鬼神』だったのです。そして、健康な生活を営むために『無病息災』を願い、これを犯す病を『鬼』としました。

時代は流れ、古代国家が成立すると、安心で安全な国づくりを目指して国家安泰がはかられるようになり、国の秩序、公序良俗を乱す者を『鬼』とします。その後、奈良・平安時代になると、朝廷をめぐる権力争いの中で敗れる者を『鬼』とします。王朝貴族にあらがう者は、まつろわぬ(服従しない)者として『鬼』に仕立てられ、歴史の表舞台から消し去られていきます。

広島神楽は、神話の時代から平安時代の終わりまで、鬼の歴史を伝えています。

国を乱す異国の『鬼』

一幕 塵倫 筏津神楽団

古代国家が統一された頃、異国から塵倫という背中に翼のある鬼が数万騎の軍勢を従え、我が国へ攻め入り、庶民を苦しめていました。そこで仲哀(ちゅうあい)天皇は自ら不思議な霊力のある弓矢を使い、神通力を持ち戦術にも長けた鬼を退治します。

仲哀天皇は国家安泰を願う「軍神」として奉られ、仲哀天皇の皇子・応神(おうじん)天皇が「八幡神」となります。

八幡神の社は、大分県「宇佐神宮」を発祥の地として時代の流れとともに次第に増え続け、現在では八幡神社四万社とされています。

都を乱す山の『鬼』

二幕 土蜘蛛 中川戸神楽団

平安時代、大和の国を一望する葛城山(かつらぎさん)に棲みつき、天下を乱そうとする土蜘蛛の精魂が、都の守・源頼光(みなもとのよりみつ)へ忍び寄ります。

その時、頼光は病に伏し、頼光の侍女・胡蝶(こちょう)は、典薬頭(てんやくのかみ=くすりのかみ)から薬を取りに来るよう命じられます。その館を訪れた胡蝶は、典薬頭を食い殺して化身した土蜘蛛の精魂に襲われます。土蜘蛛の精魂は今度は胡蝶になりすまし、頼光に毒薬を薬と偽って飲ませます。しかし頼光に正体を見破られ、源氏の伝家の宝刀『膝丸(ひざまる)』で傷を負い、葛城山へ逃げ帰ります。頼光は我が身を救ったこの宝刀の銘(めい)を『蜘蛛切丸(くもぎりまる)』と改めて、四天王の卜部季武(うらべのすえたけ)、坂田金時(さかたのきんとき)へ授け、土蜘蛛退治を命じます。二人は葛城山で土蜘蛛の妖術に立ち向かい、成敗します。

父の怨念を背負う『鬼』

三幕 滝夜叉姫 大塚神楽団

平安時代、東国の新皇を名乗った平将門(たいらのまさかど)は、天慶(てんぎょう)の乱で、藤原秀郷(ふじわらのひでさと)・平貞盛(たいらのさだもり)の軍に敗れて討たれます。

平将門の娘・五月姫(さつきひめ)は、父の無念を果たすため、貴船(きふね)の社に「願」をかけ、満願の日に貴船の神より妖術を授かります。五月姫は、名を「滝夜叉姫」と改め、父の本拠地だった下総の国・猿島(さしま)の地に戻り、多くの手下を従えて反乱を企てます。

陰陽師・大宅中将光圀(おおやのちゅうじょうみつくに)らは、勅命を受けて下総の国へ向かい、陰陽の術と邪心の妖術の激しい戦いとなりますが、滝夜叉姫の朝廷に対する復讐は叶わず、無惨に敗れ去ります。

宝物を奪われる『鬼』

四幕 青葉の笛 中川戸神楽団

平安時代、仁明(にんみょう)天皇の頃、信州の荒倉山(あらからやま)に素晴らしい音色の「青葉の笛」を持つ官那羅(かんなら)という鬼がいました。笛の音は静けさの中、都にまで届いたといひます。

在原業平(ありわらのなりひら)は青葉の笛を手に入れるよう勅命を受けます。業平は都で名のある笛吹きと偽って荒倉山へ向かい、官那羅の持つ「青葉の笛」をだまし取ります。官那羅の手下の鬼・九鬼(くき)と御影(みかげ)は、都に上って笛を奪い返し、業平の命も狙いますが、業平は諏訪明神に助けられます。